

アイウエオの五十音言霊布斗麻邇の原理が昔あったと同様の姿で復活し、天津日嗣天皇の世界の法庁・教庁・政庁がこれまた太古にあった如く新しく創設され、この政庁の言霊原理に基づく人類の第三文明の創造が開始され、その歴史創造の中に長い間溜まりに溜まった人類の罪穢が消滅して行きます。その有様は「日本人の大祖先が神鳴り（雷鳴）と喩えました人間の言語の先天構造を正確に自覚した頭脳から発する朝廷の文明創造の指令が世界の各地に行き渡り、緩急宜しきを得た政策が世界の暗雲を吹掃うように、また天津太祝詞の大乗の精神法則が世界人類を包み込んで、新しい歴史創造の大海に乗り出して行くように、言霊原理による正しい判断によって世界の複雑怪奇な混乱の自己主張の論理が一掃されてしまうように、世界を覆いつくした罪穢が残らず払われてしまいます。

ではこの様な新しい時代の政治とは如何なるものなのでしょうか。その状況が大祓祝詞の最終結論として次に述べられる事となります。この結論を示す大祓の文章は前月号の末尾に掲げましたので、その文章について詳しく解説して参ります。

高山の末、短山の末より、さくな垂りに落ち、――

柿本人麻呂特有の美文調に心奪われて読んでしまいますと、その文章に隠された言霊学の意味を見逃し兼ねません。天津太祝詞音図を上下にとった百音図（図参照）の母音は上よりアイエオウ、ウオエイアの十音となります。上の五音の属する領域が高山、下の五音が短山に属します。その高山の末は言霊ア、短山の末もアです。その言霊アとは天津日嗣天皇（スメラミコト）の座であります。天皇からその慈眼で見る世界人類のすべてを大御宝（おおみたから）または大御田族（おほみたま）といひ、天皇は人類と一体であり、この一体となった時の天皇を御身（おほみま）と呼びます。

天皇の坐ます座より「さくな垂りに落ち」とはどういう事か、と申しますと、辞書は「さかさ落とりに流れ落ちる」とあります。状況だけから解釈すればその通りでありましょうが、これに言霊の意を付け加えますと、「咲く名足りに落つ」となります。咲くとは心の表面にいっぱい言葉として表現されることです。「な」とは名で、物事の内容を

ワ	高山	アイ
ヰ		エ
ヲ		オ
ウ		ウ
ヱ		エ
ヲ	短山	ウ
ヰ		オ
ヱ		エ
ヰ		イ
ヱ		ア

意味します。「垂り」は「足り」の意で「十分に」という事です。「さくな垂りに落ち」全部で「心の内容が十分に言葉として表現されて下に伝えられ」という意味となります。

沸^{たき}つ速川の瀬^まに座^せす、瀬織津姫と云ふ神、——

言霊原理に基づく世界の文明創造の政治は、天皇を頂点とする百敷の大宮である朝廷から一瞬の懈怠・逡巡^{げたい しゆんじゆん}もなく諸種の指令が発せられます。その指令が「さくな垂り」に発令され、速川の瀬となって流れ下るように実行に移されます。瀬とは音図に向って最右の母音より計画が八つの父韻の意図のままに実行・実施され、最左の列である半母音で結果が出て指令は目的を達します。その実行の行為がアイエオウと順順に下に向って伝達されて行きます。ア段の天皇の座から発せられる指令が先ず直ぐ下のイ段に下る所にいる神が瀬織津姫というわけであります。」

この瀬織津姫^{せ おり つ}（言霊イ）に続いて速開津姫^{はやあきつ}（エ）、気吹戸主神^{いぶきどぬし}（オ）、速佐須良姫^{はやさすら}（ウ）と四柱の神々が出現します。神道で祓戸四柱の神と呼ぶ神であります。天皇（ア）より指令が天津太祝詞音図の母音の順序アイエオウと下達されて行く状況がこれから詳しく述べられる事となります。かく申しますと、この四柱の神の内容と順序が、祝詞の一番初めに出ました「比礼挂くる伴男^{ひれか}（イ）、手襷挂くる伴男^{たすき}（エ）、靱負う伴男^{ちかは}（オ）、靱佩く伴男^{たすき}（ウ）と対応している事にお気付きの方もいらっしゃるでしょう。祓戸四柱の神とは天皇より発令・下達される指令が朝廷の四つの役職を経過して、実際の国民の中で如何様に実施されて行くか、即ち言霊布斗麻邇の原理による新時代の政治の内容が述べられているのであります。祓戸四柱の神と呼ばれる社会の罪穢の祓いとは、新時代に於ける文明創造の政治そのものである事が結論づけられて行きます。

瀬織津姫の瀬を織るとは音図に向って右の母音より左の半母音に向って流れる八父韻の生命の流れ、言い換えますと、五十音図の母音の並びを空間に、母音から半母音に向う父韻の並びを時間にとり、空間と時間の交差する彩（音図・心の衣）を織り成して行く働き、これが瀬を織るという事になります。言霊原理に則って人間の生命活動は五

つの音図に作成されます。天津菅麻（イ）・天津太祝詞（エ）・宝（ア）・赤珠（オ）・天津金木（ウ）の五つであります。大祓祝詞の眼目はイアオウを中心に据えた四つの音図を検討して（大祓祝詞の文章には天津金木と天津菅麻の二つだけしか記されませんが）、それを材料として人類文明を創造するために天津太祝詞音図に宜り直すことであります。天皇から発せられる指令は先ず、瀬織津姫神（比礼挂くる伴男）の所で音図に照らして如何なる内容かが検討されます。

おおわだのぼら

大海原に持ち出でなむ。——

音図上の検討が終了しますと、一般社会への発令が決定します。社会へ広く発令することを「大海原に持ち出でなむ」と表現したのであります。何故その様な表現を選んだのか、と申しますと、それは人麻呂特有の美文調「荒塩の塩の八百道の八塩道の、塩の八百会や はいに座す…」という文章に続けるためであります。即ち「大海原に持ち出でなむ」から「海の塩」の言葉を引き出そうとした訳です。

斯く持ち出で往なば、——

天皇の命令が言霊原理に則って沙庭され、検討されて、庶民社会に発令することが定まりますと、という事です。すると事はその次の段階である速開津姫神の所へ廻されます。祝詞の初めにある「手襷挂くる伴男」の仕事が始まります。

荒塩や ぼ ちの塩の八百道の八塩道の、塩の八百会や お あ いに座す、速開津姫はやあきつと云う神、——

はやあきつ
速開津姫神とは速く（速）明らかに（開）目的に達する（津）能力を秘めている（姫）役割（神）と謂った意味であります。音図上で検討された天皇の意図即ち社会の現状を文明創造推進のためどの様な変革を実施すればよいか、そのためにどの様な手段・手順をとったらよいか、が検討・確定されます。瀬織津姫で決まった原則を、その実現のための方法が定められる段階の仕事です。それは言霊エの速開津姫神（手襷挂くる伴男）の仕事という事が出来ます。

では速開津姫神がいる「荒塩の塩の八百道の八塩道の塩の八百会」とはどんな処なのでしょう。どんな処と言っても、地球上の場所ではなく、精神的な場の事です。「荒塩の……」は人麻呂の美辞でありま

すが、この言葉の中核となるのが「塩」の一字です。塩を四穂と取れば、イエアオウ五母音の中のエアオウの四音、即ち実際に世の中を構成する四つの次元の事となります。この四つが世の中の世の語源となります。塩を機と取りますと、適当な機会という意味です。天皇からの指令が瀬織津姫の働きで音図上で検討されますが、ここまでは原則的な形式にとどまります。この決定を流動している世の中の最も適当なチャンスを捉え、状況を変革し、文明創造を推進するか、は言霊エ（叡智）の働きです。言霊学でいえば、四つの母音に対する八つの父韻の働きかけの機会を常に見極めている事が要求されます。どんなよい政策も、その施行のチャンスを逃したら、またその時の情勢判断を誤ったら、何の効果も挙げられません。「荒塩の塩の八百道の八塩道」即ち複雑に流動する世の中の状況の中で「ここぞ」という一瞬に社会全体の実相を捕捉し、そこに適当な施策を実行する実践智（言霊エ）の能力、これが速開津姫神の働きです。

持ちかか呑みてむ。——

「成る程」「よし今だ」「チャンスは此処だ」と自ら納得することで。言霊エの能力はこの様に機（潮時）を自らが納得出来る程に機敏であることが必要とされます。天皇の座から発せられ、瀬織津姫の処で言霊図に基づいて検討された指令が、此処速開津姫神の処で社会の流動する現状とマッチする様、そして変革・創造の確実な気運となるよう計画が練られます。

斯くかか呑みてば、氣吹戸に座す氣吹戸主と云ふ神、——

速開津姫の処で時機・状況に則した指令の言葉が発せられますと、次に氣吹戸主の処へ下されます。氣吹戸とは心（氣）が言葉として発音される（吹）処にある戸、平たく言えば人間の咽喉の事です。咽喉の働きで言葉が外界に飛び出して行きます。氣吹戸とは息吹が飛び出る門であり、また咽喉とは宜る門で同じ意味となります。言葉が飛び出ることを、祝詞の初めには矢が弓から飛び出る事に喩えられて、韌負う伴男（オ）と呼ばれています。この社会に向って発せられる言葉は、瀬織津姫・速開津姫の働きで言霊原理に則った指令が、氣吹戸主の処で一般社会の国民に理解出来るような法律、道徳、訓示の言葉に

組み替えられて発表されます。前号に説明されました「高山のいほり、短山のいほりを揆き分けて」の作業が行われ、国民に伝えられます。

ねのくにそこのくに
根国底国に気吹き放ちてむ。——

ねのくにそこのくに
根国底国とは太祝詞音図の並び母音アイエオウの最下段であるウ段のことです。言霊原理によって正確に検討された天皇の指令が、一般国民に通用する言葉に書き直されて、最下段（ウ次元）の大衆社会に発表されます。気吹戸放つとは発表・伝達されるの意であります。

斯く気吹き放ちてば、根国底国の座す速佐須良姫と云ふ神、——

根国底国にいる速佐須良姫とは政治上の恩恵を受ける一般大衆のことです。世の中が変わって第三文明時代となっても、この次元に属する人々の実相は変わることはありません。速佐須良姫とは「さすらう」「放浪」「流転」の意味であります。私の先師の言葉を借りますと『曠劫よりこのかた常に没して出離の期なしと観ず（教行信証）と親鸞は云ったが、神を知らず、仏に遭はず、天津日嗣の経綸を知らず、世界に対する自己の位置と意義を知らず、みずから輪廻を解脱する力なく、またみずからが輪廻していることの自覚のない大衆の境涯が速佐須良姫である。』

ではこのような一般大衆（速佐須良姫）に朝廷の指令をどのように伝え、自ら進んで遵守させるか、といいますと、祝詞の初めに出て来ました朝廷の役割の最下段（言霊ウ）にいる劔佩く伴男が働く事となります。劔と言いますと、精神的には判断力の表徴であります。けれど政治的には劔は権力に通じます。天皇からの指令が最終的に下りて来て、一般大衆に接する処に劔佩く伴男がいます。指令がどの様に伝えられ、守らせるか、は劔佩く伴男の判断に委ねられます。そして人々はその適切なお役人の判断によって喜んで法律に従い、協力するようになります。けれど大衆の中にはどうしても趣旨を理解せず、抜け道を考えたり、反抗する者も出ることでしょう。その場合の劔はやむを得ず権力の行使という形で現われます。即ち罰則が適用される事となります。

第二文明時代の政庁は、その頂点より人民に接する役人まで、すべてが権力構造という事が出来ます。けれど新時代の政庁の構造は頂点

より最下段に到るまで公平無私の慈悲の政治です。それでも私欲のため反抗する人にのみ権力の行使となります。権力と言われるものの意義が最小限に留められます。

持ちさすらひ失ひてむ。——

一般大衆は何事にも熱し易く冷め易いと謂われます。何時の時代にも変わることはありません。天皇からの指令が社会の平和と福祉をもたらし、大衆は幸福の日を過ごし、鼓腹撃壤の歌を唄いますが、何時の間にかその幸福な日常に馴れ、終に忘れてしまいます。政治を行う人々の日夜の労苦など少しも考えません。全く心許なく薄情の様に見えますが、良き政治の下ではそれでよいのであります。人々が一つの法令のもたらす好結果に馴れ、マンネリ化が始まろうとする時には、また新しい指令が下りて社会の雰囲気を一変することになるからです。かくて政治の渋滞は起こることなく、一般大衆は世の中に何事も起こらない事に安心して暮らし、政治とその政治の立案・施行者の存在すら余り関心を持たぬ事となるわけであります。大衆が政治に関心を持つ事こそ非常事態の証拠というべきかも知れません。

以上、新しい時代の政治の様相について大祓祝詞の結論の文章を解説いたしました。現代という第二物質科学文明時代の終わりに当たる国際・国内双方の政治のエゴむき出しの緊迫した状況に比べて、今、申し上げました来るべき新時代の繊細にして鷹揚な政治状況は考えただけで楽しくなるではありませんか。

大祓祝詞の骨子となる部分は此処で終り、祝詞は一気に終章に向います。その文章を次に掲げます。

斯く失ひてば、^{すめら}天皇が^{みかど}朝廷に^{まつ}仕え奉る、^{つかさつかさ}官々の人たちを始めて、
天の下四方には、今日より始めて、罪と云ふ罪はあらじと、高天原に
耳振立てて聞く者と、^ひ馬牽き立てて、^{みなつき}今年の六月の^{つもごり}晦日の^{くだち}夕日の降の
大祓に、^{もろもろ}祓ひ給ひ^{よくに}清め給ふ事を、^{うらべ}諸 聞し召せと宜る。四国の^{まか}卜部等、
大川道に^や持ち退りて^{まか}祓ひ^や劫れと宜る。

天皇（スメラミコト）が主宰する朝廷で仕事をする文武百官が、それぞれの心中の高天原に於いて耳振り立てて聞くべきもの、と言えば、アイエオウ五十音言霊音図、布斗麻邇の原理であります。これを天の

斑馬（ぶちこま、まだらこま）と呼びます。百敷の大宮と呼ばれる天皇の朝廷の政治とは、天の斑馬という天津太祝詞音図上の政策決定に始まり、それを時宜に適した民衆の理解し易い言葉に書き分け、政策を隅々まで浸透させ、それぞれの地域から世界全体まで人類文明創造を推進さすことに終わります。「馬牽き立てて」とは、二千年前の崇神天皇による言霊原理の隠没以前に於いては、六月と十二月の大祓の儀式の式場で斑馬である太祝詞音図の縦の各行を「タチテトツ・ン、カキケコク・ン、マミメモム・ン……」と言葉に出して朗誦し、百官に聞かせた事を言っています。竹内古文献にその記事が載っていると聞いています。「夕日くだちの降」とは夕日よくにが傾く時の意。「四国のうらべト部」とは朝廷のある都より見て四方にある国の意。ト部とは大祓の儀式を司る役人の事であります。

以上、長い間大祓祝詞の解説をして来ました。祝詞に使われる用語が言霊原理に照らしませんと意義不詳のものが多く、その一つ一つに註釈を加えながらの解説でありますので、思わず八ヶ月を要することとなりました。その長い期間のお話となりました事で、読者の皆様には大祓祝詞全体の文章が一貫した筋道の通ったものとして御理解頂けなかったのではないかと、思います。そこで大祓の文章を現代人に理解できる言葉で、文章の途中で何らの用語の註釈を加えることなく、お伝えしようと思います。平易な言葉にするため文章が簡単となり、時には奇異に感じる方もあるかと思いますが、祝詞の内容には変わりがない事を申し上げます。